

れをして満足に一日を遊ばしめたり。

一、副食物には、かまぼこ、漬物。

一、前日に於ける活動寫眞の談話を語らしめたり

「即ち敷島俱樂部へ行きました」。「如何な寫眞を見ましたか」と云ひしに、「女の人が河へ落ちる男の人が助けたところを見ました」と云へり。

## グロースの遊戯論

倉 橋 生

以下の日誌は略す

漸く學齡に達し其の年四月小學校へ送る時は根本的に人格を變へたとは云へぬが不良分子だけは充分取り除いたと自信した。

小學校の訓導に入園以來の有様及取りし方法を充分話し將來を、くれぐれも頼んで置いた。(終)

グロースの遊戯論は、皆さんは兒童心理の書物を御覽になりますと大抵の書物には皆参照して

居ります有名な書物であります。遊戯の事に關しましては、別段改めて申上げるまでもない、御分りになつて居る事のみであらうと思ひますが、普通の書物には、グロースの事を餘り詳しく論じて居りませぬ。即ち遊戯の根本的研究の一つとし

て、之れを出来るだけ忠實に紹介して見たいと思ふのであります。

グロースは元來美學者でありまして、初めて著述せられました時に、美學入門と題する書物を書きました。それから以來、美學と遊戯と關係あると云ふ所からして、此書物の著述に着手せられたのであります。一番初めに出ましたのは、「動物の遊

「遊戯」と題するので、これが千八百九十五年に、ギルセンから出版になつて居る。其次に、「人間の遊戯」と云ふ書物を書かれました、これが千八百九十九年にパーセルから出版して居られます。其「人間の遊戯」を書かれました時に、色々兒童のことを研究されましたとして、「兒童の精神生活」といふ書物が、千九百〇四年に、第一版を出されて千九百〇八年に、改版して第二版が出て居ります、先づ我々の直接關係のあります問題に就て、グロースの著書は、これだけであります。近來では大部の美學に關する著述をされて居る途中でありまして追つて其書物が出る筈であります。極く最近には、妹さんでありますか、お嬢さんでありますか、或は奥さんでありますか、或る婦人の名前と一緒になつて、獨逸の、色々文學等を研究した、雜誌等で發表されて居ります。

グロースの遊戯書物は、二冊兩方とも、英譯が出来て居ります、亞米利加の、ポールドインと云ふ

人が、英譯して居ります。で、一方は、動物の遊戯の方であります、一方は、人間の遊戯の方であります。可なり色々な事が充實して、極めて書いてありますからして、内容に於ては、餘程大部のものになつて居ります。

さてお話の順序としてグロース自身の遊戯の學說に這入ります前に、其先驅としてグロース前の遊戯論から考へてゆきたいと思ひます。

遊戯の問題殊に子供は何故遊ぶであらうか、何故遊ぶことを好むであらうかといふ説明、即ち遊戯の由來の方面に就て、グロース以前に於て、一番勢力を得て居りましたのは、過剩勢力説といふのであります。此學説は、ズット古く其の元を索ねて見ますと、彼の有名な獨逸の詩人のシルレルに其元を發して居ります。シルレルが、人間の美育に關して、美術的教育に關する手紙を、澤山友人其他の人に送つて居りますが、其手紙を集めて居るものの中に、此種類の説が出て居るのであり

ます。其手紙に依つて見るといふと、凡そ斯ういふ事を申して居ります。「自然は總ての世の中の生物、理性を有して居ないやうな生物にまでも、其生存に必要なもののみを與へたばかりでなくして多少の餘裕が與へてある。即ち生活の爲に押し追まられた、色々の必要な事はかりでなしに、自由が多少與へてある、獅子が野を彷徨ふて居りました、腹の空いて居る時には、其空腹を充たす爲には餌食を涉さる。しかし、空腹が充たされた後も餌食を涉さるやうなことをして、色々深く野の方を廻つて、彼所此所を駆け廻つて居る。小さい蟲は己れの必要以外の、明い方に集りて、日光に浴しやうとして居る。又鳥は自分の友を呼ぶといふ生活の外に美しき聲を出して鳴いて居る。斯う云ふことが色々な生物界に行はれて居る。これ等は自己の生活の必要以外に行はれて居る、自由の範圍に屬することでありまして、これが即ち遊戯である、斯ういふのであります。即ちこれを約め

て申しますと、生活に必要な丈の勢力を、生物が用ひて居る時には、それは、仕事であつて、生活に直接必要のない範圍まで、餘計の勢力を使つて居る時に、これが遊戯となる、といふ事を言つたのであります。これが即ち過剩勢力と云ふ言葉の出ました、基でありまして、先づ學說といふ程にはなりませぬけれども、元を索れば、シルレルに是だけのこと、書かれてあるのであります。斯う云ふ説が、シルレル以降、色々の人に依つて唱へられて居りまして、有名な、ジャンパウルまでが叫んで居ります。ジャンパウルの言つて居ります言葉で、仍且さういふ意味を申したのがあります。即ち遊戯といふものは、我々の精神及び肉體の兩方の力があり餘つて出来たものである。我々の精神及び肉體の力が、有り餘るから出来たものである。而してシルレル及びジャンパウルに依つて斯く云はれて居る考へは、英吉利の哲學者でありませすスペンサーに至りまして、一つの學

説の形を成して來ました。スペンサーは、大著述

たる心理學原論の中に、審美的感情といふ章を設けまして、其中で遊戯のことを論じて居るのであります。スペンサーの書いて居りますのは、自分は曾つて獨逸の書物の中で、遊戯は勢力の過剰に依つて生ずるものであるといふ説を、チョット見た事があるけれども、其説を何人が言つたのであるか、或は其言葉がさうでなかつたか、スツカリ忘れて仕舞つたけれども、其考は自分に一つの刺戟を與へて、自分が今や遊戯の學説を考へる時に當つては、これと同じ事を考へざるを得ない、と斯ういふ事を論じて居る。今から考へると、スペンサーはシルレルの手紙を讀んだものと考へられるのであります。先づ普通遊戯の研究の中で、過剰勢力説と云はれて居りますのは、シルレルに始つて、スペンサーに依つて、組織立てられました。「シルレル・スペンサー」説といふ學説であります。これから此二つを批評して御話して行かうと思ふ

のであります。

スペンサーの學説が、シルレルの考に對して、全く同じであるか、或は多少の改良を加へてあるか、改良を加へてあるかといふことを、第一に考へて見ます。大體スペンサーの書いて居りますこととで、シルレルが先程申上げました手紙の中に書いて居りますやうなことは、大體に於ては、其儘來て居るのでありますが、此所に一つの違は、スペンサーになりましたからして、遊戯の學説の中へ、摸倣即ち眞似をすると云ふ、一つの精神活動を重要な要素として加へて居るのであります。スペンサーの考へますには、成程遊戯と云ふ者は、我々の精神及び肉體の力が有り餘るからして生ずるものであるけれども、若しそれ丈けであるならば、總ての生物の遊戯といふものは、皆同一でなければならぬ。然るに總ての生物は、其種族に依つて遊ぶことも違ふ、其種類の違ふことは何によりて説明するであらうかといふ議論に逢着しまして、

それは摸倣と云ふ一つの精神作用よりからであるといふ解釋が出来たのであります。即ち其遊戯は其生物の勢力の過剰から現はれるのであるが、何等かの形を執る上に、大人の仕事は大人の遊戯と一致する道理であるといふ風に論じたのであります。此點はシルレルが、單に精神的にのみ考へて居りましたのに對して、最近にスペンサーが學問的に、遊戯を考へて來た結果でありまして、慥かに着眼に於ては、大なる進歩であります。しかし其に心付いた所は進歩でありますけれども、解釋の仕方に至つては、これが間違であつたのであります。

是より後、シルレル・スペンサー說、即ち勢力過剩説は、色々の學者によつて、批評されました今日此グロースが大成するやうになりましたのは、主としてスペンサーの摸倣といふことが主となつて居るのであります。良い事は考へましたけれども、説明の仕方で過ちを犯かしたといふ次第であ

ります。此所まで申上げて來て、此シルレル・スペンサーの説を、モット簡單に、分り易く約めて考へて參りますと、凡そ四つの段階に、今までの學説を約める事が出來ます。即ち勢力過剩説は次の四項の段階によつて、これを説明しやうとするのである。

第一は、高等なる動物は、下等なる動物よりも、生活に就て樂である。詰り自分の有つて居る、精神の力及び體力といふものは、生活の必要にのみ使はないでも、充分に其所に餘分が生ずる譯である。これはスペンサーが論じて居ります。下等生物だけそれだけ生活に忙かほしい、人間でも下等の人と、上等の人は、生活の忙がさが違ふのである。スペンサーは面白いことには牡蠣かきを取つて來ました。多少發達した動物ならば、犬でも馬でも海老でも蟹でも、皆遊びますけれども牡蠣、が遊んだのを見た事はない、牡蠣のやうな、下等のものになると、生活の爲に非常に忙がしくて、

餘力を以て遊戯をするといふことは出来ない、といふ例に使つて居ります。

第二段としては、其あり餘つたる力が、外部に溢れる時には、一方の力は何か一つの仕事をすることも知れないけれども、他の一方の力が幾つもあり餘つた所から、一つの力が仕事をして居る間に他の力は仕事がなく、單に付き纏つて居る。即ち我々の生活といふ方のものは、勢力といふものは一部分だけ仕事に使つて、一部は使はれずに居るといふのである。

第三の段階になりますと、其使はぬ力が、或る程度まで上ると、ジツトして居ないで、何か外部へ溢れ出るやうになる。

第四の段階では、其溢れ出たる勢力といふものは、摸倣によつて、何かの遊戯の形を執る。斯ういふのが、勢力過剩説の大體であります。其所で此四つに分けました、第三段目までの個條といふものは、これは論のない事でありませんが、我々の

問題になつて來るのは、第四番目の溢れる勢力が、遊戯を形造つて行くといふことになりますから、これから摸倣といふ事に就て、少しく議論をする必要が起るのであります。

グロースの考では、此摸倣によつて、子供が遊ぶとい事が、大に氣に入らないのであります。即ち勿論グロースでも、色々の遊戯の中には、摸倣を基の遊戯といふものを認めて居りますけれども、總ての遊戯が摸倣を基にして居るといふことは、どうしても賛成が出来ない、即ちグロースの考では、摸倣といふ如き高尚なる精神活動よりも、モット初期の、モット低い所のものによつて、遊戯が行はれる。摸倣で遊ぶといふやうな、高尚なる精神活動が、まだ起らない中に、子供は多く遊ぶものであるといふ事を云つて居ります。

遊戯があつて、それから後に生活といふものが出来て居るから、生活よりは遊戯の方が先きである。遊戯は摸倣に非ずして、豫行であるといふ考

を出して居るのであります。それに就て色々例を列べて居りますが、小さい鳥は、まだ飛ぶといふ必要がない中に、巢の中で矢張り翅を動かして居る。又若い動物は、まだ生活の爲に外へ歩き出る必要のない中から、脚を動かして飛んだり歩いたりして居る。又猿の極く小さい赤ん坊も自分の爪を以て何か握らうと藻掻いて居る。犬も又色々の他の犬と走つたり或は口先を舐つたり、さういふ風な色々な仕事をする必要のない中に、飛んだり轉ねたりして遊んで居る斯ういふ色々な生物界に行はれる現象と云ふものは、單に相當に發達したる生物の、して居ることを見て、それを眞似するといふよりも、モット初期に於て、生物が勝手に自分で遊ぶのである、さういふ事例の實例を擧げて證據立て、居る。此點に於て、第一グロースが攻撃して居るのであります。

摸倣といふ考へで、遊戯を見ましたのは、スペンサーのみでありませぬ。極く近頃では、獨逸の

大心理學者のザントなども、此摸倣を以て遊戯の要素として居ります。グロースは矢張りザントの説を攻撃して、摸倣説はいけないと云つて居るのであります。

それならばスペンサーの説の中から、摸倣といふ事を取除いて仕舞つて、……唯今までは、スペンサーの説を主として批評し攻撃して參りましたけれども、摸倣といふ方を取除いて、其殘る部分に於けるスペンサーの學説は、どう云ふ風に批評すべきであらうかと云ひますと、これ又種々な攻撃點が起つて來るのであります。先づ我々の精神及び體力に於て、旺盛なる時には我々が能く遊ぶといふことの、日常の現象たることは疑ふことの出來ないことであります。即ち機嫌の良い時に遊ぶといふことは、總ての生物界通有の現象でありまして、此點は誰れも疑ふ事の出來ないことであつて、最も生物界に於ては天氣の影響を受けて居るのであります。良い天氣の時には鳥も遊ぶ、他

の動物も遊ぶといふことは疑ひのない事實であります。即ち心に一つの愉快があり、或は身體の健康が非常に秀れて居るやうな場合、換言すれば、精神的肉體的に於て勢力が過剰した場合には、我々は能く遊ぶ。殊に鳥に於ては、過剰したる勢力は、聲となつて現はれる。人間でも機嫌が良いと鼻唄でも唄ふ。上機嫌といふものは、我々の愉快の原因になるといふことは、これは疑ひのない事實である。疑ふ事の出来ない事實でありますけれども、而かも此機嫌の良い時の我々が、能く遊ぶといふ一つの事實が、果して我々の遊戯全體を説明する事が出来るか、即ち體力の旺盛と、精神の快活といふことは、我々の遊戯を起さず、必然の原因になつて居るであらうかどうであらうかと、これを考へるのであります。總ての我々の精神活動といふものは、其精神活動の行はれるのに、都合の良い一つの事情といふ事と、精神活動を行はなければならぬ一つの原因といふ事とは違つたこ

とであります。即ち好都合なる事情といふことと精神活動が起る爲には缺く可からざる原因といふものとは、區別する必要があります。此遊戯の場合に於て、勢力の過剰、即ち身體及び肉體に於て機嫌の良いといふことは、其孰らに屬するものであるか、スベンサー及びシルレルは此二つの區別を恐らく忘れて居つたのであります。即ち勢力が過剰して機嫌の良いことは、遊戯の好都合なる事情であるといふことは、我々も賛成せざるを得ないのでありますけれども、之が遊戯の全體の基礎である、即ち勢力過剰が根柢をなして、これを作るといふことは、同感し難いのであります。殊に勢力過剰説の人は、總ての遊戯が、前に申しました、色々の形を以て、生物に特有なる形式を以て現はれて來るといふ事に就て、始終困難を感じて居るのであります。其點から申しましても、これは何か他の關係を以て補はなければならぬ。其所で此所まで論じて參りますと、クロース自身の



説が、此所から出て來るのであります。

グロースに言はせるといふと、此正しき解釋といふものは、スペインサーも殆んど其側まで行つて居る。スペインサーの書いたもので生物論を讀んで見ると、自分の説の眞近まで行つて居る。スペインサーは遊戯は勢力の過剰に起る、其勢力過剰は摸倣によつて、遊戯の形を取るといふことを論じて其次に、どう云ふものが摸倣されて居るであらうかと云ふ議論を提唱して居らぬ。單に摸倣と云つても、どんなものが摸倣されて、どう云ふものが摸倣されないかといふことは、直ぐ起る疑問であります。此事で我々が過つたのである。子供は甚だ摸倣性に富んだものであるといふ論でありますけれども、若し摸倣性に富んで居るものであれば甚だ詭辯のやうになりますけれども、兒童が單に摸倣性のみ富んで居りますならば、兒童は何も出來なくなる。周圍には色々の物があつて、例へば、椅子もある。机もある。犬も居れば猫も居

る。であるから、摸倣性を最限なく發揮するものとすれば、兒童は何も出來なくなる。兒童は摸倣性に富んで居るといふ事以上に我々は此問題を調べて考へなければならぬ。兒童は或物を摸倣して或物を摸倣しない、其原因は何處にあるであらうか、又兒童だけに就て考へて見ますと、少し分り悪いやうな事ではありますが、生物全體の摸倣性といふものから考へて見ますと、生物は其種族の摸倣しかりしないのである。人間の子供は多くを摸倣しますけれども、犬、鳥、猿などの摸倣する時に、或る種族特有の摸倣の手法といふものは決つて居る。兒童は摸倣性によつて、色々の遊戯をなすけれども、何を摸倣して、何を摸倣しないかは、是非考へなければならぬ問題になるのであります。其所以此問題を自分で列べて、スペインサーは斯う答へて居るのであります。それは非常に大切な事でありますが、其生物の摸倣するものは、其生物に取つて必要な。或は特別な關係のある動作のみ

を摸倣する、或る生物が、(人間も其中へ這入りませんが)生物或は其子供の摸倣するのは、其生物に取つて、其生物の生活に必要ななる、或る特別な關係を有つて居る動作のみを摸倣する。斯う云つて居るのであります。さう考へて參りますと、問題は摸倣といふ事でなくして、何が必要かといふ事が、或は適切な問題になつて來るのであります。

即ち摸倣といふことは、兒童の精神活動の方面から云つて、一つの條件ではありますけれども、其摸倣が或物を摸倣して或物を摸倣しない、スペンサーの考へて居りますやうな、特別な關係ある物だけを、摸倣すると致しましたならば、摸倣といふものは力である。こちらの方が大切な問題になります。其所で、生物は何を眞似するかといふことに、我々は眼が着いて行かなければならぬ、グロースが、自分の學説を作つて行つたのは、其點に出て居るのであります。スペンサーのは斯うも言へるのであります。生物は其生活に特別必要

なる動作のみを摸倣すると云つて分るのであります。別の言葉で以て名付けましたならば、それは直ちに、**本能**と字が當て嵌まるのであります。

其生物が生活に特別に必要な關係ある事柄といふものは、即ち生物特有の本能といふことになつて來たのであります。でありますからして、グロースの、遊戯は本能であるといふ所の考へは、直ぐに此所から起つて來るのであります。其所で此本能説と勢力過剩説とは、どう云ふ風な關係を有つて居るかといふことを、もう少し進んで考へて見たいのであります。

グロースの考ふる所によると、總ての生物にはそれに特有なる本能がある。其特有なる本能が其儘現れれば、其生物特有の遊戯となるのである。生物特有の本能が、其儘外部へ現はれて、それが其生物特有の遊戯になる、決して摸倣と云ふやうな、一種の手段を俟つて、其生物特有なる遊戯といふものが出來る譯ではない、さう考へて參りま

すと、グロースも、勿論、或勢力が過剰して居るといふことは認めて居りまして、繰返して申しましたやうに、遊戯の好都合なる事情といふ中には數へて居りませぬけれども、本能といふものを以て遊戯の説明をする場合に於ては、此過剰勢力といふものは、其一つの非常に大切なる働きを、奪はれるやうな形を呈して來るのであります。即ち過剰勢力説の方では、遊戯は總て力があり餘つてそれが外部へ出て遊戯となるといふのでありますけれども、一度本能といふものを取つて、遊戯の説明をするやうになれば、本能以外に過剰の勢力はなくても、色々の遊戯を作るといふことを考へざるを得ない、即ち生物に特有なる本能があるといふ事は、即ち本能そのものを外部へ發揮することに自然になるのでありますから、遊戯は本能によつて起るものであるならば、何も過剰せる勢力といふやうな、他の働を借りる必要はないのであります。即ち遊戯の動力といふ事と、遊戯の形式

といふ事が、グロースの説になると、一緒になつて仕舞つた。別にグロースの申した言葉ではありませぬが、分り宜い爲に斯う云ふ言葉を用い得られます、前説の動力は過剰勢力であつて、形式は摸倣に據つた。グロースのは形式も動力も、一緒になつて、それを本能が支配して居る。グロースとシルレル・スペンサー説の、違ふ所は、最も此點を存するのであります。

此所にチヨット峽みまして、もう一つ他の學説を御紹介して置きます。グロースが、本能説といふものを出して、さうしてシルレル・スペンサー説を攻撃しない以前に於ては、過剰勢力説の敵といふものは、勢力恢復説と稱せらるゝ學説であつたのであります。即ちシルレル・スペンサー説の、遊戯は勢力の過剰によつて起ると云つて居るに對して、主として獨逸のスタインタール其他の人が、勢力恢復説といふ事を言ひ出した。之等の人々の考へでは、總て此の人間の遊戯といふものは、遊

ぶといふことは、實生活によりて消費されたる勢力を恢復する爲に存在して居るものである。我々の實生活によつて、消費されたる勢力を補充するのは、一方に營養と、一方に睡眠と、此二つによつてであつて、もう一つ其働きの補ひをするものは遊戯である。斯ういふ事をスタイルタールは言ひ出した。此學説はナカ／＼勢力を持ちまして、皆様も名前をよく御承知の獨逸の、體操遊戯の學者で、體操の事を非常に論じました、グッツムースといふ人は、遊戯全集といふ書物を書きまして其標題に斯ういふ言葉を使つて居る。此本は身體及び精神の運動と恢復の爲の遊戯を蒐めたものである。身體及び精神の運動の恢復の爲め遊戯を集めたものである、我々の考へによりますれば、精神及び身體のとして宜いのでありますけれども、グッツムースは斯く信じて居りましたから、身體及び精神恢復の爲の遊戯といふことを殊更に書いて居るのであります。此説の名前だけを御紹介し

て置きますが、シヤラー、或は、ラザルス、斯ういふ風な人が、皆な此勢力恢復説を信じて居る。殊にラザルスといふ人は随分外國の方にも有名な學者でありますが、この説を分り易い爲に、勢力過剩説を、シルレル説といふ如くに、此勢力恢復説をスタイルタール、ラザルス説、斯う云つて居る人もある位であります。

いつも、勢力恢復説の論者の引きまゝ話があります。これは、グッツムースの中に書いてあります。これは、聖書の中にあります。使従ヨハネといふ人が、何んだか忘れましたが、何んでも小さい鳥と遊んで居つた。其所へ丁度弓を持つた獵師が出て來まして、驚いて、あなたは有名なヨハネ先生である。貴方の被仰ることは非常に嚴格で一分も迂かりしては居られなへやうに被仰るが、今日は小鳥などと遊んで随分詰らない、と少し輕蔑の意味を以て冷やかした。ヨハネは、君の持つて居る弓は何故さう緩めて居るのかと問ふた。獵師は答

へて。獵師は弓を持つて始終走り廻つて居る商賣だからして、用ひない時には緩めて置かなければならぬ、といふた。さうするとヨハネは、小鳥と遊んで居るのは、それと同じ譯だと、云はれたといふ、斯ういふ、話が残つて、それが何時も勢力恢復説の人の引合に出されるのである。即ち遊戯といふものは、生活をするに極めて必要な勢力を、平素消費しない爲に、恢復して置く爲に起るものである。約めて云へばさう云ふ事になるのであります。其所で、字から御覽になつても分りますやうに、過剩勢力説と、勢力恢復説とは、極端に反對である。一方は、遊戯といふものは力のあり余りで起ると云ひ、一方は、力が無くなつたから遊戯が出るといふ、非常な反對である、同じ人間の生活でも解釋の立て次第で斯うも違ひが起るものか、一方では、あり余るから遊戯が起る。一方では無いから遊戯が起るといふ、或る方面から見ますと、如何にも二つの極端に隔つて居りますけ

れども、其實、もう少し研究して見ますと、實は同じことを云つて居るのかも知れない。即グロースの引ひて居りまする例に、學生が非常に勉強して飽きが來た、そこで玉突をしたりして、盡きた勢力の恢復を圖るとも云へる、ところが、一方から云へば、机の上で非常に勉強をして居つた爲に自分の體力といふものを發揮することが出來ないから、それを玉突の方に行つて、過剩した勢力を漏らす、斯う過剩勢力説では解釋することが出来る。さういふ風に論じて、グロースは、兩方を違つた説ではないと論じて居るのであります。でもあ、勢力恢復説といふものの問題は、歴史的には勢力過剩説とは全然違つた反對のものになつて居りますけれども、心理的に研究を積んで参りますと、過剩勢力説と勢力恢復説とは、殆んど差異のない學説のやうに思はれます。尤も、此の學説の缺點は、大人の考のみを考へて居る。疲れたから恢復する爲に、遊戯をするといふことは、大人の

見地からのみ研究したのである。で恢復説の論ずる所では、小さい子供の遊戯でありますとか、若くは、動物界に行はれる遊戯といふものは理解し悪い、それを出すと、非常に都合が悪いから出して居ない、さう云ふ事に大なる缺點があるやうであります。

何故此所に、グロースが斯んな事を狭んで、勢力恢復説を論じたかといふと、多くグロース以前に於ては、過剩勢力説に反對する者は、即ち勢力恢復説の見方にあるものの如く、誤解せられて居りましたから、其誤解を避ける爲に、態々、勢力恢復説といふものを、此所に出して、自分は決して勢力恢復説を尊崇する譯ではない、自分が過剩説に反對するのは、別の立場から反對するのであつて、過剩説に反對するが故に、直ぐに此説と、解釋せられては困るといふ爲に、念を押して論じたのであります。

それから再び話を元に戻しまして、グロースの

本能説の方に這入つて參ります。グロースの本能によりて、遊戯が起るといふ説には、二つの根據があるのであります。即ちシルレルスベンサーの説に於て、考へて見ますといふと、力の方が、此遊戯の動力より先きであつて、さうして、遊戯の形の方が、後から出來ると、斯ういふ風に考へられて居る。けれども實際を見ると、實際動物などの遊んで居る所を見ると、それに反對である。例へば、猫が遊んで居る。其猫が何か玉を以て巫山戯て居ります時に、何も猫は、遊んで戯れて居るのは、ジツトして居られてない程、勢力過剩があつて、それが出て來て、玉遊びをするといふのでなくして、猫が遊ぶうとして居る所に玉が與へられた。玉を見た爲に遊びたくなつて、來て遊ぶといふのである。元來の動力の刺戟といふものは、外の原因があつて中から起つて來るのではない、或は犬を連れて、非常に遠道をして歩きます、さうすると犬は疲れて、トボ／＼して勢力が盡きる

さういふ時に何か面白い事でもあると、直ぐ犬は飛び出して遊びに這入る、といふやうな事で、これは、決して、力が先きであつて、形式は後であるといふ議論とは一致して居ない、即ち、疲れて居つても、外に適當なる刺戟さへ與へられれば、其刺戟に應ずるやうに遊ぶものである。殊に小さい動物であるとか、或は子供は、殆んど始終遊んで居つて、遊んで疲れて、さうして寝るといふのが兒童及小さい動物の生活であります、斯ういふ事は決して力が余つて居るから遊ぶといふことの證明にはならない、どうしても刺戟の方が、遊びの形の方より先きであつて、遊ばなければならぬといふ、刺戟を受けさへすれば、力は其刺戟に應じて、集つて出て來るものであつて、力の方が先きではないといふことを云つて居るのであります。

第二の根據は、同じことを別の言葉で、生理的に論じて居るやうな言ひ方であり、スベン

サーの勢力過剰といふ説の中には、斯う云ふ事が一つ説明せられて居るのであります。我々の勢力のあり余りで遊戯となるといふことを、生理的に説明しまして、神經の平均といふ事を以て、これを説明して居るのであります。

我々の神經の纖維が、或るエナージーを保つて居りまして、それが始終平均して居ればジツトして居る。或る神經が激しい勢力になつて、或る神經が、それに應じない状態であると、力のあり余つた神經は、平均を保つ爲に、それだけを外部に放出する。斯ういふ風にスベンサーは考へて居る。それに對してグロースは、遊戯といふものは神經の平均に基いて起るのでなくて、遊戯の神經は始終外部から來ると、斯う論じて居るのであります。これはまあ、さう云ふ言葉を使つて居りまして、實例は前申しました。疲れて遊ぶといふ實例が、これの證據になるのであります。

是れで大體、グロースの、人の説を評し、自分

の云はんとする大體を盡くして居ります。其次にグロースの書いて居りますことで、今まで論じて來た所の、遊戯といふものは、生理的、若くは心理的に考へて來た。力のあり餘るにしても、模倣にしても、本能にしても、又、勢力恢復にしても、

總て遊戯といふものを、生理的若くは心理的に考へて來たのであります、けれども生物の問題といふものは、單に、生理的若くは心理的の解釋のみで分るものでない、即ち生物には、必ず生物學的解釋といふものを必要とする。即ち生物界に多く行はれ、殊に人間に多く行はれて居る、此貴重な遊戯といふものは、單に内部の勢力の溢れから生ずるのであるとか、或は單に無意義な模倣によつて出來るものであるといふ、解釋では、今日の我々は最早満足が出來ない、もう少し生物其ものの目的の爲に、何か遊戯に直接な關係を有つて居るものを以て解釋したいものである。此所に一つの猫が何かして遊んだ。此猫を、勢力が有り餘つ

て遊んだと解釋した意味には、單に心理的の解釋であつて、猫の一つの生物としての意味といふものは、一つものは一つも其所に這入つて居ない、これが何うにか解釋しなければならぬと思ふのであります。

グロースの考では、即ち自分の探つて居る本能説といふものは、其見地から、非常に都合の宜い解釋を與へるものである。本能といふものは、即ち其生物特有なる一つの、或る生活に直接な、大切な關係を有つて居る働きでありますからして、其本能が、外部へ現はれて遊戯の形を取るといふ即ち生物の生活に非常に必要なる一つの動作になるのであります。即ち遊戯といふものは、單に自己の生活に残るといふやうな事でないに、これに其生物の種族として必要なる關係を現はして來る。斯ういふことを言つた。クッツムスといふ人が、體操の事を論じた中に、我々の遊戯の事を論じて我々の遊戯體操といふものは、單に個人の問題で



はない、其種族の問題でなければならぬ。即ち我々が體操をして、其人の子供の子供が、伶俐になつとか、丈夫になつたとかといふのでは、全體の目的を達した譯ではない、それ以外人間として、種族の大なる目的、種族の發達に關係して來なければ、其目的を充たしたのではないと言つて居ります。グロースの云はんとする所は、即ち其事になるのであります。そこで、グロースの考は、遊戯といふものは、其生物が、後になつて自己の生活をする爲に必要な準備である。斯ういふ風な解決になると、生物の遊ぶのは、本能が基になつて居るのであるから、後に自己の生活をするに必要なる準備といふ風な考に至るのであります。

此遊戯を以て、生活の眞面目なる、自己若くは生物の種族の生活に、貴重なる、重要な事と關係あるといふ風に解釋して來ますと、グロースの遊戯に對する貢獻の大なることを知るのであります。遊戯を文學的に心理的に研究した人は澤山あ

りますけれども、今の教育に於て重要な學說として、論ぜらるゝに至つたのは、グロースの本能論以來であります。遊戯を、斯ういふ風に解釋して、生物各自と密接の關係あるものとしまして、初めて現在、我々が考へて居りますやうな、遊戯の意味が、出て來るのであります。我々が始終考へて居ります、フレーベルの遊戯の説といふが如き、フレーベルはグロースの説は知らなかつたのであります。フレーベルの教育上の考へは斯ういふ風になつて居るのであります。グロースの考を以て、フレーベルの學說が形成せられたといふ譯であります。これは餘程面白いこと、思ふのであります。

近代教育に於て、遊戯といふことが、重要な位置を占むに至つたのは、グロースの功と云はなければならぬ。此の點は、遊戯研究史中、グロースが重きをなす、第一の點であります。遊戯といふものが教育に必要なことは、多くの人の認むる

所でありますけれども、其學説を研究し、其基礎を索ぬる時に於ては、どうしてもグロースを源にする必要があるのであります。唯だグロースは、遊戯を餘りに、本能に牽強けて解釋した嫌がある。従つて眞面目なる生活の準備といふ事に、餘り力を入れ過ぎました結果、其遊戯説といふものは、どうも實際的の意味に傾き易くなつたのであります。

グロースの論じて居りますのは、自分は斯ういふ風に論じて來て、本能を以て遊戯の基礎として來たけれども、吳々も茲に斷りして置きたいのは、本能は遊戯の基礎である、けれども決して遊戯の

全體が、本能に依つて現はれるといふのではない、本能無しには遊戯はない、といふ事は自分の強く主張する所であるけれども、しかし、總ての遊戯が皆な本能といふのではない、殊に高等動物の高等なる遊戯に於ては、本能以外色々の要素が其中に這入つて來て、複雑なる遊戯が出來て來るのである。本能即ち遊戯、遊戯即ち本能といふのでは決してない、遊戯の基礎は本能にあると、斯ういふのである。其所で此次に起る問題は、其本能といふものは果してどんなものであるか、これを研究する必要が起つて來るのでありますが、此處で止めて置きます。